



Title	小特集序文：北海道大学CoSTEPシンポジウム 手のひらから宇宙まで～電波が創発するコミュニケーション，そしてアート～
Author(s)	種村, 剛
Citation	科学技術コミュニケーション, 21
Issue Date	2017-06
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/66327
Type	bulletin (other)
File Information	9_jyobun_109-110.pdf



[Instructions for use](#)

小 特 集

北海道大学CoSTEPシンポジウム

手のひらから宇宙まで

～電波が創発するコミュニケーション、そしてアート～

2017年8月から約2ヶ月に渡って、札幌国際芸術祭（Sapporo International Art Festival; SIAF）2017が行われる。芸術祭の開催に先立ち、同年3月11日に、北海道大学CoSTEPが主催となり、科学技術とアートの関係を考えるシンポジウム「手のひらから宇宙まで～電波が創発するコミュニケーション、そしてアート～」を、北海道大学工学部フロンティア応用科学研究棟 鈴木章ホールにて実施した（共催：北海道大学物質科学フロンティアを先導する Ambitious リーダー育成プログラム、協力：札幌国際芸術祭実行委員会）。

本シンポジウムの目的は二つある。一つは、電波を用いた通信技術を、アート、電波の原理、そして通信メディア史の三点から捉え直すことで、科学技術コミュニケーターに必要となる、事象を多角的に捉える視点を提供すること。もう一つは、アートと科学技術をテーマにすることで、科学技術コミュニケーションの有用性を、アートに強く関心を持っている人々に訴求することである。

アートと科学技術の融合について聴衆にイメージを持ってもらうため、シンポジウムの広報媒体は、企画の趣旨を理解しているデザイン事務所「空のアトリエ」へ制作を依頼した。

シンポジウム登壇者の多摩美術大学 美術学部 情報デザイン学科教授であり、ARTSAT×SIAF ラボ（SIAF2017参加作家）プロジェクトリーダーを務める久保田晃弘氏は、アーティストの立場から ARTSAT 作品を中心に電波を用いたアートの表現について、北海道大学大学院 情報科学研究科教授の大鐘武雄氏は、電波とは何かを科学者の視点から、そして、東京大学名誉教授の原島博氏は、電波を用いた通信技術の発達と人びとのコミュニケーションの変化について、それぞれ講演を行った。

講演後には、会場の展示ディレクターを務めたメディアアーティスト・札幌大谷大学専任講師の小町谷圭氏をパネリストに加え、パネルディスカッションを行って議論を深めた。ディスカッションの進行は、CoSTEP 特任助教の朴炫貞が務めた。討論の最後には、新田孝彦 北海道大学理事・副学長（当時）が、それぞれの講演について総括を行い、シンポジウムを締めくくった。

本小特集は、これらの講演（原島 2017; 久保田 2017; 大鐘 2017）、パネルディスカッション（朴他 2017）を収録している。

久保田氏は「宇宙からの芸術」と題して、衛星を使った芸術プロジェクト ARTSAT と、札幌国際芸術祭2017で実施するアートプロジェクト space-moere を紹介した。ARTSAT は衛星通信を用いて、宇宙と地球を結ぶメディアアートプロジェクトである。電波と超小型衛星の技術が、地球規模の芸術活動を可能にすることを示した。

大鐘氏は「無線通信の仕組みについて、不正確だけどわかりやすさを追求したお話…」として、電波と無線通信のしくみを解説した。講演の最後に「分かりやすい説明と厳密さは両立するのか」と科学技術コミュニケーターを目指すCoSTEPの修了生に問いを残したことが印象的であった。

原島氏は「電波と私～それはどう関わってきたのか？ これからどう関わるのか？～」と題して、電波と人の関わり、そして無線通信が人びとのコミュニケーションに与えた影響を、情報通信の歴史とともに解説を行った。情報通信技術の発達によって「メディア漬け」になった人々は、本当の意味で幸せなのかとの問題提起は、科学技術と社会の関係を考える上で欠かせないものである。

「パネルディスカッション～電波と共に描く未来～」では、ディスカッションに先立ち、小町谷氏が、space-moereで行うパフォーマンス Tele-coding の実演を披露した。討論では、技術を開発する研究者・技術者と利用者の関係、今後より重要になってくるアマチュア=愛好家の立場、そして、アートとサイエンスの関係について、闊達な議論が交わされた。会場全体を使った展示パフォーマンスを組み込んで実施したシンポジウムは、今までにない新しい試みだったといえるのではないだろうか。これらの講演とシンポジウムの詳細は、朴(2017)においてもまとめられている。

北海道大学は札幌国際芸術祭2017と特別連携し、展示やワークショップ、トークイベントを実施する。その一環として、CoSTEPは、2017年5月13日に開講特別プログラムとして、芸術祭のゲストディレクターである大友良英氏を招き「科学とアートのコミュニケーションが始まる。」と題した一般公開講演を行った。この講演内容は、次号に収録する予定である。

文責：種村剛(科学技術コミュニケーション編集委員長)

●文献：

原島博 2017:「電波と私～それはどう関わってきたのか？ これからどう関わるのか？～」『科学技術コミュニケーション』21, 129-137.

久保田晃弘 2017:「宇宙からの芸術」『科学技術コミュニケーション』21, 111-118.

大鐘武雄 2017:「無線通信の仕組みについて、不正確だけどわかりやすさを追求したお話…」『科学技術コミュニケーション』21, 119-128.

朴炫貞 2017:「2016修了式公開シンポジウム報告「手のひらから宇宙まで～電波が創発するコミュニケーション、そしてアート～」北海道大学高等教育推進機構『ニュースレター』108(2017-4), 26-28

<https://high.high.hokudai.ac.jp/wp-content/uploads/2017/06/108.pdf> (2017年6月6日 閲覧).

朴炫貞・久保田晃弘・大鐘武雄・原島博・小町谷圭 2017:「パネルディスカッション～電波と共に描く未来～」『科学技術コミュニケーション』21, 139-152.